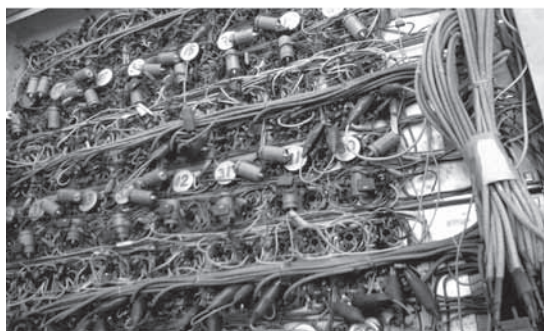


先

般の全国大会で第4回の情報処理技術遺産認定式を行い、これまでに認定した情報処理技術遺産は計55件、分散コンピュータ博物館は6件となった。関係者のご努力でこの活動が少しずつではあるが学会の内外で認められてきたように思う。我が国コンピュータの歴史的遺産の保存の必要性を痛感して2007年に情報処理学会として提言したが(<http://www.ipsj.or.jp/03somu/teigen/museum200702.html>)その実現性が見えない中、せめて現存する史料の保存を促進しようとして進めてきたものである。

古いコンピュータの遺産を保存する意義は色々あるが個人的には、それを見たときの感動を次の世代に伝えたいという思いが強い。過日、情報処理技術遺産として2012年3月に認定された日立のHIPAC MK-1を内部まで詳しく見せていただく機会があった。プリント配線基板もない時代に一本一本の配線を手作業でやりながら作り上げた巨大なマシンである(写真はその配線)。計り知れない苦勞と工夫の末にこれが動いたときの関係者の感激はいかばかりであったろう。実物を見るとその感激が伝わってくる。現在のコンピュータはこれに比べたら何万倍、何百万倍の性能と規模を持ちしかもそれが小さな半導体チップに収まっているなど技術の質もレベルもまったく異なるが、先輩たちの成し遂げたこの成果を見れば現代の研究者、技術者も感動するにちがいない。そして自分の抱える問題解決への何らかのヒントを得られたり、チャレンジ精神を鼓舞されるのではなかろうか。

米国のコンピュータ歴史博物館を見学して、保存して意味があるのだろうかという疑問に思うような物まで保管されているのを知った。たしかに、歴史に対する評価が時代によって変わることを考えれば、現在の我々の物差しで判断して取捨選択するのは良くないかもしれない。事情が許す限り幅広く保存して



おくのが正解であろう。歴史的史料の保存に対する彼らの熱意を知るにつけ、振り返って我が国はどう

基
般

[シニアコラム]

IT好き放題



[No.16]

コンピュータの歴史的遺産の保存に取り組んで

もその熱意に欠けるように思えてならない。これはコンピュータ分野に限らず、日本人のDNAがそうなっているようだ。社会人類学者 故梅棹忠夫によると「技術の開発と発展のためには、成果よりも、それにいたるまでの経過の記録と、その分析がたいせつである。ところが、そのほうは、信じられないくらいおそまつなのである。日本人には、自分のしとげた仕事の記録をのこすという習慣が、あまり身につけていないようである。どんな仕事でも、日本人のやったことを、すこししらべてみるとわかるが、たいてい、まことに貧弱な記録しかないものである」(岩波新書「知的生産の技術」より)。我が国のコンピュータに関しても同様で、開発の経過やどんな問題をいかに解決していったか等の記録はほとんど残っていない上に肝心の成果である実物史料ですら満足に保存されていない。貴重な研究・開発の経験が次世代に役立つ社会的蓄積となっていないのである。

我々の活動を推進するうえでは、まずは情報処理学会内でも関心を高めていただくことが不可欠と思う。そのために情報処理技術遺産認定式を全国大会の大会式典の中でやっていただきたいというのが歴史特別委員会の強い願いであるし、コンピュータ史研究会のようなものは作れないのかとも思っている。会員の方々の一層のご理解、ご協力をお願いしたい。

(2012年2月10日受付)

発田 弘 Hiroshi HATTA

(沖コンサルティングソリューションズ(株))

[名誉会員] hatta746@oki.com

昭和38年東京大学工学部電子工学科卒業。同年日本電気(株)入社。平成15年同社退職。同年沖電気工業(株)入社。平成22年同社を退職。現在は沖コンサルティングソリューションズ(株)フェロー。本会関係では、理事(平成2~3年度)、監事(平成6~7年度)、副会長(平成11~12年度)、歴史特別委員会委員長(平成18年~現在)、功績賞(平成13年)、フェロー(平成14年)、名誉会員(平成17年)。